

時の世にいだかれて (その一)

ゆとろ 満

一 滝川先生との出会い

その日は細い雨が音もなく降っていた。九月の初旬であった。まだ残暑が残る時期であったが、教室の中は冷氣さえ感じられた。天上から吊り下げられた電灯の大半は、灯りが点かず薄暗かった。球切れは補給されず、埃を被ったままであった。

いつもはあちこちからおしゃべりの声が聞こえたり、立ち上がったたりする子どもたちもいたが、このときの教室は静まり返り、子どもたちの視線は教壇の担任に集中していた。常とは違う雰囲気、子どもたちは幼いなが

らも感じ取っていたのだろう。先生のネクタイ姿は滅多に見られなかったのだが、この日、滝川先生は濃紺の無地のネクタイを締めていた。そのことも子どもたちを緊張させたひとつだったのかも知れない。

「これからみなさんに大事なお話をします」と、滝川先生は言っておもむろに白墨を取り、黒板に「滝川 清人」と団扇のような大ききさで書いた。書いた字から白墨の小さなかけらが黒板をツツツと伝わって下に落ちた。チョークを持つ先生の右手の親指と人差し指の先の腹が白くなっていた。

「みなさんは先生の名前はとづくに知っていますよね。

しかし、名前の漢字は知らないと思いますので書きました。皆さんには少し難しいかも知れませんが、一字でも余計に漢字を覚えて欲しいと思ったからです」

そう言うと、滝川先生は一文字一文字を指しながらゆつくりと読み上げた。読み終えると子どもたちの方に向きを変えた。東彦は正面を向いた先生の顔を、まるで初めて見るようにまじまじと見詰めた。先生の顔がとも凛々しく見えたのである。そして「おれたちの先生は王子様のような」と、驚きと感動がないまぜとなった感情が湧き起こってきたのであった。東彦の気持ちをとおとなが代弁すると「色白で知性あふれる表情」ということである。この先生の凛々しさは、東彦の住む村落では今までに一度たりとも出会ったことのない風貌でもあったのである。説明を終えた先生の口から「私はもう一度勉強をするために先生を辞めて、明後日、東京へ出発します」という思いがけない言葉が発せられたのである。

当時、学制改革で新制中学が発足し、また「すし詰め学級」で知られたように児童数が増加し、教員の補充が追いつかなかつた。滝川先生は正式な教員免許を持たないいわゆる「補助教員」という臨時任用の教員だったのかも知れない。そのため学期半ばではあったが、教員免

許を取得するために東京に旅発つことになったのである。

東彦は、以前から滝川先生のが大好きであった。

滝川先生はいつも笑顔を絶やさなかった。例え、子どもたちがうるさく騒ぎ立てたとしても声を荒立てたり、叱りつけたりすることは稀であった。ゆつくりと静かにいくども言い聞かせるのであった。大声で叱られることに慣れている子どもたちには、当初、先生の言葉になかなか従おうとはしなかった。しかし、次第に先生の優しい口調にほだされていった。そして、いつしか飼い犬のように従順になってしまったのであった。東彦にとつても先生の何事にもやさしい指導や対応の仕方は驚きであり、褒めたり、優しい言葉で話しかけるなどということには恥と思ひ込んでいた。このガジ（がき・餓鬼）！とか「言う（こと）聞くワラスども（子どもたち）」などと口汚くののしるのが常であった。このようながさつな日常の背景には経済的、精神的に余裕のない生活があったと思われる。しかし、それらの言葉に憎しみが含まれているかという点、必ずしもそうではない。むしろ、粗野な表現に愛情が込められていたと

いう場合もしばしばあったのである。彼らは何百年の間、日柄地面を舐めるようにして生き、権力におもね、長いものには巻かれる式で生きてきた百姓の末裔である。「褒める」などという言葉は、気恥ずかしくて容易には使えなかったのである。また、まだ頑是無い年齢の東彦にはそんな回りくどい事情など分かりようもなかったのである。従って、東彦はおとなという者はそういうものと思つて七歳近くまで育つてきたのである。周りのほとんどの子どもたちはみな似たようなものであった。

ところが小学校へ入学して担任となつた滝川先生は、東彦が抱いていたおとなの基準から外れていた。「こんな優しいおとなもいるものだ」と驚きを持った。それは新鮮な感情であり、おとな、あるいは人への信頼感、また人を慕うといううるわしい感情が芽生えた瞬間でもあった。時間の経過とともに先生とふれ合う機会が多くなるにつれて、東彦は滝川先生を尊敬し、憧憬の気持ち強く持つようになった。それは授業終了後、ほんの五分ほどであったが、いつも昔話や童話を話してくれることも寄与していたに違いない。滝川先生の話は、時折炉端で話してくれる祖母の昔話とは大いに違つていた。語り口に抑揚があり、悲しいときには悲しいように、う

れしいときにはうれいように感情のこもる表現豊かな語り口であった。微かではあるが今も先生が話してくれた「かぐや姫」は東彦の記憶に残っている。先生はこの話を数回に分けて話してくれた。東彦はこの話の続きが聞きたくていつも翌日が待ち遠しかった。竹藪で光る竹からかぐや姫を救い出した場面や、月に還るシーンには身も心も引き込まれてしまつていた。滝川先生の話は、東彦を「知的世界」へ誘つた最初のものであった。身近に読書の環境など全くなかつたにもかかわらず、東彦を小学校三年生の頃より読書好きにした土壌は、この一年生の時の滝川先生の「語り聞かせ」にあつたと思われる。

滝川先生が教員を辞し、東京へ行つてしまふ、と聞いた東彦は大きなショックを受けた。と同時に、いつかこのような日が来るのではないかという予感が現実になつたような思いでもあつた。滝川先生は今いる環境には馴染まず、異質な存在のように東彦は子ども心にも感じていたからである。通常なら離任式があつて、校長からの離任の理由とこれまでの功績に対するねぎらいの言葉があつたはずである。そして、離任する滝川先生からも別れの挨拶があつたろうと思われる。しかし、東彦にはその記憶は一切ない。超マンモス校であつたため、また当

時の混沌とした状況の中では離任式そのものがなかつたかもしれない。それ故に、滝川先生はクラスの子どもたちに別れの言葉を懇ろにされたのかもしれない。その後、滝川先生の後任の教諭が東彦たちのクラスに配置されたはずである。しかし、東彦には滝川先生からの別れの話聞いた以外、何の記憶もない。まるで上映中の映画が突然切れ、そのまま上映中止になつたような具合である。担任が学期途中で替わるといふことは滅多にないことである。滝川先生ほどでなくても後任の担任の記憶が多少はあつてもおかしくないはずである。しかし、その記憶は一切残つておらず、すぐに二年生の担任の記憶へとつながつてしまつていゝる。滝川先生の印象が強すぎたためかもしれない。

当時の長町小学校の学区は、広瀬川と名取川と大年寺山に囲まれた東西十キロ、南北十二〜三キロの広大な地域であつた。一学級児童数の平均が五十数人であつた。この学区の広さ、児童数の多さにもかかわらず家庭訪問があつた。家庭訪問の時期は、多分四月下旬か五月上旬ではなかつたかと思われる。滝川先生が東彦の家を訪問したその日は、穏やかで暖かな日の夕刻近くであつた。家の周りの畑は農作物で賑やかになつていた。東彦がな

ぜこれほどにこの日のことを克明に記憶しているかという、普段と異なる父の状態にあつた。この日、父親は職場の宴会のようなものがあつた。勤務のシステムで宴会は昼頃から行われた。酒好きにもかかわらず悪酔いする父は、この日も酩酊して帰宅したがひどい悪酔いで、台所の板間に大の字に伸びて「苦しい、苦しい」と唸り声を上げていた。居間ではなく台所でひっくり返つてたのは「家庭訪問」があるという意識が脳の片隅にあつたからだろうと推測される。母親の由美は困り果てた顔でうろろうろしているだけであつた。東彦もこんな見苦しい唸り声を滝川先生に知られたらどうしようかと、戸惑いと恥ずかしい気持ちがないまぜになつていた。そうするうちに滝川先生が訪ねてきたのである。「ごめんください。長町小の滝川です」という声が玄関先から部屋の中に届いてきた。するとあれほど大声で呻吟していた父親の唸り声が、びたりと止まつたのである。母親はどれほど安堵したか。東彦もほつとし、父親への懸念も消えかかつていた。部屋に入った先生は、座布団の上に正座しカバンから手ぬぐいを取り出した。そして額を拭きながら囲炉裏の五徳に置かれた鉄瓶の口から吹き上がる蒸気を静かに見ていた。囲炉裏は半畳の大きさで夏の始ま

る頃までいつも炭火が燃えていた。暖房と簡単な煮炊きを兼ねてのものであった。東彦はこの囲炉裏を挟んで滝川先生と斜めに対面するように座っていた。これまで先生と一対一で向き合うことなどなかった。それだけどのようなに対処したらよいのか分からず足を崩したり直したり、また両手を落ち着きなく開いたり握ったりしてもじもじとしていた。

「東彦君、家に帰ったらいつも何をして遊んでるの」

突然の先生の言葉に、東彦は喉を詰まらせたときのよう目を白黒とさせて、

「ようちゃん」と

かろうじて答えた。

「ようちゃんという」と

「いとこのようちゃん。本家の子」

「ああ、そうか。隣の家の安斎洋平くんだね。どんな遊びをするの」

「時と場合によるけど。大体は自動車ごっこや虫取りだね」

東彦の緊張は薄らいで来たようだった。言葉が滑らかに滑って来た。

「自動車ごっこ」と

「ようちゃんのとうちゃんがトラック持っているからそのトラックの運転の真似だっちゃ」

「そうか、洋平君のお父さんはトラックを持っているのか」

「うん、運送会社の社長だっちゃ」

「あれ、東彦、そんな生意気な言葉を使うもんでねえよ。先生に少し失礼だす」

台所からお盆を提げながら出てきた母親が東彦の言葉を聞きつけてたしなめた。

「先生済みません。見ての通り親子ともども野育ちなもので、言葉のつかい方もきちんと出来てなくて」

「なあにそんなこと少しも気になさらないでください。

民主主義の世の中になったんです。思ったことを自由に自分の言葉で話すことが一番大切なことですから」

由美は息子の担当がきれいな標準語で話す言葉にうつとりとした。

「そうですね、先生。民主主義の時代になったんですよ。おなごの人たちも意見を言えるようになったんですよ。ありがとうございます」

母親の由美はうれしさを面に表しながら重ねて「ありがとうございます」と言った。そして、既に容易をして

いた茶碗をお盆に載せ、お茶を淹れて「どうぞ」と差し出した。

「そう言えば先週でしたか、『社会学級が開設される』というお知らせを息子がもらってきましたが、その中に『民主主義って何ですか』という講話があるとありました。すごく興味があります」

普段とは違って標準語を使う由美の口調にぎこちなさがあった。酔っている夫の耳に入ることを気にしてのことかもしれない。夫は、妻の外出を嫌っていた。

「それはいいですね。是非参加してください。社会学級というのは、成人の方々を対象とした一般教養を身に付けるための講座です。うちの校長の高橋先生は開設にとっても熱心でしてね、特にこれからの社会を担う大切な役目は女性、しかもおかあさん方であると、参加を熱心呼びかけています。高橋校長はまだ四十代前半の年齢ですが『民主主義の世の中をつくっていくのは教育だ』と情熱を傾けているんですよ。とにかく『女性が家に縛り付けられてものも言えず舅、姑、夫に服従してきたこれまでのことを変えなくちゃあ』と、一所懸命なんです」

「そうですか、女が自由にものを言える時代をつくるんですか」

「そうですね。ぼくもそう思います。育児や家事で忙しくなかなか時間をつくるのは難しいでしょうが考えておいてください。あつ、すみません。東彦くんのことを話さなければいけないのに別な方向に飛んでしまいました」

由美は、滝川先生の熱心な話に心が奪われる思いであった。「民主主義」という言葉はよく耳にしていたが、その内容についてはよく分からなかった。しかし、その新鮮な響きに心が躍る思いがあった。と、同時にこの会話が夫の耳に届いていないことを願っていた。

「いええ、先生から民主主義の話を開けただけでもありがたいです。社会学級への参加は、今は難しいですけどよく考えていきます」

「講座」に出席したい気持ちは大きくなったが、幼い四人の子どもを抱えての現状ではとても無理なことは端から分かりきっていたことであつた。さらに、夫の許しをもらうことも困難であることも分かっていた。その思いを押し込めるようにして由美は先生にお茶を進めた。そして、

「東彦もかあさんの側に座って先生のお話を聞きなさい」と、東彦に声をかけた。東彦は、普段口にしなない「かあさん」と言う言葉に「かあちゃんすかしている」

と思ひながらも素直に従つた。

この日、滝川先生は東彦のことを褒めてくれた。「とても好奇心の強いお子さんで学習意欲も素晴らしいです。期待できますよ。ですから、東彦君の個性を大事にして見守っていくことが大切ですね」という言葉であつた。我が子への「好奇心」とか「個性を大切に」などという言葉は、由美には初めてであつた。そして、この聞いたこともないハイカラな褒め言葉に由美は感激してしまつた。普段、叱ることばかりで我が子の良さを認めてこなかつたことに痛く反省させられたのであつた。実は、由美は我が子の落ち着きのなさを相談しようと思つていたのであつた。

入学の一ヶ月ほど前のことであつたが、東彦はガソリンを飲んで医者往診を受けていた。トラック用のガソリンが入つていた一斗缶にホースを入れ、口で吸つた拍子に飲んでしまつたのである。

母の弟である学は、長兄が経営する運送会社のトラックの運転手をしていた。学は、常にガソリンを入れた一斗缶を補充用としていくつか倉庫にストックしておいていた。そして、時折トラックの燃料函にこの一斗缶から注油していた。注油するに当たつて一斗缶にホースを差

し込み、反対側のホース先端に口を付けて勢いよく吸い込み、ガソリンが出る瞬間に燃料函の注油孔にホースの先端を差し込むのである。吸い込む力が弱いとガソリンはホースを上らない。かといつて力が強過ぎるとガソリンが口の中に溢れてしまふ。微妙なタイミングと素早い動作が必要であつた。好奇心の強い東彦は、いつも叔父の学とその仕事を見ていたのである。そして、いつか叔父と同じことをやりたいという気持ちが高まり、その機会を今か今かと窺つていたのである。

たまたまその日、ガソリンの入つた一斗缶が倉庫の外に置いてあつたのである。東彦はだれもいないのを見計らつてチャンスとばかりにとつと決行に及んでしまつた。六歳過ぎたばかりの子どもである。一斗を超えろホースに口を付けて吸い込むには力が足りなく、ガソリンをホースの端まで吸い上げることは難しかった。それでも何回かやつていけるうちにコツを会得したのでらう、うまく吸い上げることができた。ところが口を離すタイミングまでは知りようがなかつたのである。そのままガボガボとガソリンを飲み込んでしまつた。驚いた東彦はホースを手にしたまま倒れ込んでしまつた。逆にそれが幸いした。倒れた拍子にホースが一斗缶から引き抜かれた

からである。もしホースを放して倒れてしまつたら一斗缶のガソリンはホースの先端から溢れ、東彦はガソリンまみれになり、ガソリンはなくなるまで地面に排出されることになつていただろう。

「ぎゃーっ」という叫び声を聞きつけた母親の由美は何事かと駆けつけた。ガソリンの臭いが周辺に充滿していた。息子の東彦は白目をむいて倒れ込んでいた。由美は瞬時に状況を理解した。そして、義姉や母親を呼ぶと手伝つてもらいながら東彦を自宅へ運んだのである。すぐにかかりつけの只野医師に往診を依頼した。東彦は体を拭いてもらい、着衣全てを取り替へてもらつて床に臥していた。ガソリンの臭いは体中から吹いていた。しかも口を開ける度にその口からもまるで湯気を吐くように臭いを吹き上げていた。吐き気が止まらなかつた。胃の中の内容物がなくなつてからも東彦は吐き続けた。弱り切つた「かあちゃん苦しい」という声が続いた。母親や祖母たちはただ手をこまねているばかりであつた。何しろ子どもがガソリンを誤嚥するなどということは考えもしなかつた。従つてその処置など知る由もなかつたからである。熱もないのに井戸の冷えた水を入れた水枕を頭の下に敷き、その水で冷やした手ぬぐいを額に置くこ

としか思いつかなかつたのであつた。

小一時間ほどして只野医師はバイクの音を轟かせ、到着した。看病に戸惑つていたおとなたちは一様にほつとした。「救いの神が現れた」とはこのことだ、と後年由美は東彦に言い聞かせたほどである。

「肺病の薬としてガソリンを飲む人もいるくらいだからたいした心配はいらないな。まあ一週間もすれば治るよ。とにかく水をどんどん飲ませ、消化の良い物を食べさせるように」

軍医上がりという只野医師は義務のように東彦の胸に聴診器を当て、また、目と喉を覗きこんだ後に、気楽にそう母親に伝えた。

「胃の薬を調合しておくから後で取りに来て」
それだけ伝え、洗面器の水で手を洗つと帰つて行つた。その後にはバタバタというバイクの排気音が遠くまで残つていた。医師の去つた庭には余韻のように青いガスが薄く漂つていた。

東彦はしばらく重湯で過ごした。しかし、その重湯もなかなか喉を通らなかつた。食べたい気持ちはあるのだが食べようとするとガソリンの臭いが立ちこめ、食欲が止まつてしまふのであつた。回復は只野医師（東彦はこ

の医師の名前の音から「ただ（無料）で診療してくれる」と長いこと思い込んでいた。」の言うとおりの「日柄」の問題であった。日が経つにつれ、薄皮が剥がれるように体の中から臭いが消えていった。しかし、東彦にはこの事件がトラウマとなり、しばらくの間ガソリンの鉱物的な臭いと薄いピンク色の液体には思い出しただけで吐き気を催し、嫌悪感を持ち続けた。

母親の由美は弟の学や義姉の里久、母親のハルたちに平謝りだった。火の気のないところではあったが、もし何かの拍子に火でも付いたら東彦の胃腸障害だけではとどまらなかったからである。祖母は「何やらかすかわからない（分らない）わらすこだ。全く目が離せない」と由美に当たった。由美は二人に頭を下げるしかなかった。そして、「入学したら学校の先生に相談しよう」と固く心に決めていた。由美の近辺には育児の相談をまともに受け止めてくれる人などだれもいなかったからである。また、その頃の農家の女性たちにとって、学校の先生は崇めるような対象であった。東彦の祖母などは、家庭訪問を「先生様がござらっしゃる」と最高の敬意を持って表していたほどであった。由美にしても担任の先生に相談すれば何でも解決できるぐらいの気持ちを持っていた。

「落ち着がない」などと叱られることがあっても褒められることなどない日々である。それが母親の目の前で褒められたのである。しかも、深酒でダウンしているとはいえ、薄い一枚の戸板を隔てた隣で、父親もこの話を耳にしているはずであった。東彦が鼻高々になったのも当然なことであった。そして、滝川先生をありがたく思い、尊敬の気持ちを抱くようになったのも自然な成り行きであった。

先生を見送った由美はいかにもほっとした様子であった。東彦も子どもながらに緊張が解けると同時に、どつと疲労感が押し寄せて来たのだった。先生の辞去を待っていたかのように、父親が再び唸り声を上げ始めた。昼間の酒が利きすぎたのか、あるいはよほどの悪酔いだったのかもしれない。由美は夫の苦悶を気にする風もなく「茶碗を台所に片づけておいて」と東彦に言うなり、母屋に駆けて行った。母屋に住む実の母親に預けていた娘たち三人を引き取りに行ったのである。

東彦が入学した小学校は、仙台市立長町小学校であった。学校の周りには田園が広がっていた。古来より長町は宿場町として発達した。旧市と長町を隔てるのが広瀬川である。この川は都心と青葉城趾を繋ぐ大橋の下を

持っていた。

ところが由美は機先を制されてしまったのである。まさか担任の先生にこのいたずらっ子が褒められようとは思ってもなかったからである。しかもあまり耳慣れない「好奇心」などという舌を噛みそうな言葉で褒められたのである。相談の言葉を飲み込むというより、どこかへ飛んでしまったというのが実際のところであった。

その後、由美がしきりに「好奇心」とか「個性」という言葉を使うようになったことが何よりの証拠であった。当然、東彦もその「お褒め」に与り、しばらくは大声で叱られることはなかった。「先生に褒められた」ということは、この頃の子どもや親にとっては大変名誉なことであった。母親は自分の子育ての苦労が報われた思いで一杯であった。何しろこの時、六歳を頭に末が四ヶ月の子まで四人の子を抱えての生活であった。まともに育てて当たり前と言われ、褒められもせず、いたわりもないもらえない時代であった。それだけに初めて入学させた我が子が担任に褒められたのは、自分が褒められたのと同じくらいうれしかったのである。由美はこの日の陽気と同様に、心が明るくなったのは当然のことであった。

東彦にしても同様である。いつも「顔が汚れている」

ゆつたりと流れ、直に左に湾曲した清流は、銀鱗を翻す鮎を抱きながらやがて広瀬橋に至る。この「広瀬橋の南」とから長町駅までの約一キロの大動脈が古くから長町を支えてきた。この町はさらに長町駅前から諏訪まで約一キロ続き、それで『長町』と名付けられた。」

（『ぶらり長町』）

東彦の住む郡山は、この長町駅及び操車場を挟んだ東側一帯である。東彦が長町小学校に通っていた頃は東北本線の他に東北で最大の操車場があり、また貨物線が走り、機関区があった。郡山側と長町側との間の幅はおよそ二八〇び、そこに数本の本線と四十の貨物線が並んでいた。（『長町駅』菅原保則）そこを走る入れ替えの機関車、貨物車、貨物列車、そして本線を客車が走る。長町と郡山を往来する人々は、踏切とてないこの鉄車の頻繁な往来をくぐるようにして渡っていたのである。例えると地雷原を突破しながら日々往来していたようなものであった。小学生たちのことを考えるとよくぞげがもなく過ぎたものと思う。この極めて危険な線路帯に地下道が完成したのは昭和二十九年一月一日であった。長町駅前から学校まではおよそ八百びあり、商店街が連なっていた。自宅から長町駅まではおよそ一・二キロほどで

あった。自宅から駅に至る道路は、道幅が三間（五四寸）あったので「三間道路」と呼ばれていた。未舗装であったから風が吹けば埃が舞い上がり、雨が降れば泥道と化した。中学生たちはと言えば、一団となって中学校までの二・五キロほどを走って通っていた。一種の集団登校であったが現在のそれとは違い、当時の中学生たちはあくまでも自主的に行っていた。地区の子供会もそうであったが、おとなの介在はほとんどなかった。おとなたちは忙しすぎて子どもに構う暇などなかったかもしれない。しかし、結果的にこのことが子どもたちの自主性や自治能力を高めていったのだろう。この三間道路を過ぎると鉄路の横断、そして商店街へと続く。この通学路は実に変化に富み、退屈からほど遠かったのも事実である。「ピンポンダッシュ」という子どもの悪遊びがある。下校途中などに児童が家々の門や玄関についているチャイムを鳴らし、家人が返事をして出てくるとダッシュして逃げ去るというものである。東彦たちも似たような悪ふざけをした。多くは商店である。それも駄菓子屋のような小さな店である。勿論当時、チャイムはなかった。チャイムの替わりに呼びかけの挨拶をするのである。店主などが店にいないのを確認し、訛った言葉で「もうす、

もうす」と呼ぶのである。「もうす」とは「申し」のことで「申しあげます」の略語、「ごめんください」の意である。「はあーい」と店主や店番がうれしげな声を上げて奥から出てきた瞬間を見計らって、駆け足で逃げ去るのである。店の者たちにとっては、「腹正しいことこの上ない」ことである。この悪さは相当行われたらしく教師から数回にわたって注意がなされたほどであった。商店主から学校へ再三にわたっての苦情があったのである。

その他にもおとなをこけにする遊びがあった。駅前の広場などで三、四人固まって座り込み、話をするのである。当時の人たちは今と違い、子どもたちへの関心は非常に強かった。何かにつけおとなが子どもを見守るという環境であった。従って、この固まって何かひそひそ話をしている子どもたちには必ず「なんじよすたっぺ（どうしたの）」と心配そうに声を掛けてくる。その声と同時に「なんでもねえすた（なんでもありません）」といて蜘蛛の子を散らすように逃げ去る。善意のおとなは呆然と残されるのである。逃げ去った子どもたちは再び集まり「だまされた」「引っかかった」と快哉を上げる。善意を踏みこむにじむ誠に卑劣な行為であった。

機関区の向かい側には伊勢煉瓦工場があった。煉瓦を焼成する燃焼場に連結して煉瓦積み煙突があった。その煙突の場所は一段と高台になっていた。高台の西と南側面は石積みとなっていた。そこは陽当たりもよくその上、煙突の下でもあり、他の場所よりも温度が高かった。その暖かさ石積みの組み合わせの隙間が蛇の格好の棲家となっていた。蛇はヤマカガシである。当時はこの蛇を毒蛇などとは思いつかなかった。平気で手づかみをして、ポケットに入れたり自慢げに首に巻いたりした。また、怖がる女の子たちにわざと見せつけたり、投げつけたりした。この時、東彦が石垣の穴に逃げ込んだ蛇の尻尾を掴み、引っ張り出そうとしたが無理であった。蛇の力は強く、頑として動くことはなかった。胴が引きちぎれるほどに引っ張った。しかし、びくともしなかったのである。東彦は根負けして尻尾を放した。その時、蛇が鱗を逆立てた時の強さに驚いた。その時の蛇の筋肉、皮膚の感触を今もしっかりと記憶している。（蛇が鱗を逆立てるのではなく下腹部の腹鱗を立てるのではないかと思われる）

東彦が小学校に入学したのは昭和二十五年四月五日であった。校舎は西校舎と職員室などがある管理棟、そし

て講堂（当時は「体育館」とは呼ばなかった。）と校舎が並ぶ東校舎であった。コの字型に配列された校舎で、コの字の欠けた箇所正門があった。また、東校舎の南端の一教室だけが内側に折れて、南校舎の体をなしていた。入学児童は五五〇名を超えていたと思われる。当時の様子を校長であった高橋富士男先生が「百周年記念誌」に次のように書かれている。

（前略）

その当時の学校はどこでも終戦直後の混乱を残していた。児童数が三千二百を越し、教師は六十五、それに給食、用務員のおじさん、おばさんを加えると七十数名にのぼる県下第一のマンモス学校だった。それに東校舎には新制中学校として誕生した長町中の生徒が、すし詰めにつまっていた。従って学校運営は二部授業で、登校と下校、授業を待つ子どもが渦を巻いて溢れていた。

あの年は今年のように寒い冬だった。窓ガラスどころか窓枠さえもない西校舎の廊下には、雪が吹きだまり、かためられ、物資不足でゴム靴も下ばきも買えない子ども達は一月の厳寒にふるえ、足踏み

しながら授業の始まるのを待っていた。教室の破れたガラスの窓には、画用紙や板などがはられ、燃えない泥のような亜炭がくすぶっていた。

それに校庭は、雪がとけると泥沼だった。戦時中の食糧補給で野菜を作った因果である。便所は不足して一時間目の休憩時には、もう渡り板はびしゃびしゃで足の踏み場もなく、その下をおしっこが流れていた。(後略)

高橋先生が校長として赴任されたのは東彦が入学する二年前であった。東彦が入学した時には既に校庭は整備されていた。水はけをよくするためまずコークスを敷き、次に砂を入れ、土を被せたという。当時としてはかなり念を入れた作業だった、と後年、東彦は聞いている。窓ガラスを入れるため「四十才を少し越したばかりの若い校長」だった高橋先生は、「ガラス箱六箇の配給券を握って、市役所をかけ回り、修復に力を入れた。このお陰で東彦たちは雨の日でも風のある日でも落ち着いて授業を受け、そして滝川先生の話聞くことができたのであった。

ガラスは戦後随分と経過しても不足していたよう

であった。小学校の少し先にある長町中学校に東彦が入学したのは、昭和三十一年のことである。この中学校在学時に耳にした話である。近くに仙台商業高等学校があった。その仙台商業の全ての窓ガラスに「仙商」と白ペンキで記名されていた。疑問に思い剣道部の顧問に尋ねると、校舎一階の窓ガラスが全部盗まれたことがあり、その対策として記名したのだという。似たような話はあちこちでたくさんあった。

東彦は長町小学校には二年生まで在校した。その後、分離独立した東長町小学校に移った。東彦の家からは田んぼを挟んで指呼の間にあった。軍需工場であった東北金属工業の敷地北端の一部を転用して建設したのである。学校は一九五二年四月、当初、郡山分校として開設された。この結果、すし詰め教室も緩和された。それでも一クラス五十名を越えていた。

東長町小学校の所在地は「郡山」である。従って、当初は「郡山分校」と呼ばれたのである。これは仮称であった。一年後、本校の長町小学校から独立することになる。独立となると正式な校名を決めなければならないところがその校名は所在地名である「郡山」ではなかった。地名と全く関係のない「東長町」の文字が用いられ

たのである。「東長町」と命名されたのは地域間の縄張り争いというか、勢力争いというものがあつた。郡山地区の西北、長町の南に位置する地域が諏訪という。江戸時代は宿場町で栄えたところ。東長町小学校建設推進にあたって、この諏訪町の長老が委員長の任に当たった。また、この町には市議会議員も在任していた。長町小学校から分離独立して学校が建設され、いざ校名を決める段階になった。通常であれば地名を校名にするところである。ところがこの長老を中心とした「諏訪派」が「諏訪小学校」を主張して譲らなかつた。当時「郡山」に比べ諏訪は国道が走り、その国道沿いには商店街も連なっていた。郡山地区に比べはるかに開けていた。また、郡山にある地域の氏神様である諏訪神社は元々諏訪町にあつたものである。操車場の敷設に伴い郡山に移築・遷座されたのである。創建一〇五六年という由緒ある神社である。諏訪派はこの氏神様の社名を尊重しろというのである。その主張には侮れないものがあつた。それに対し「郡山派」は論客が少なく、地元の顔役も諏訪派に比べ弱小であつた。しかし、「建設推進委員会」の委員数では勝っていた。しかも「地名を校名に」というのは正論でもあつた。かなり議論し、揉めた。よくあることで

あるが最終的に妥協案が出された。「本家である」長町小学校の東側に位置するから「東」をつけて「東長町小学校」で落ち着いたのである。なんとも味気ないものであつた。東彦たちは何となく長町に屈服したような劣等感を覚えたのである。この劣等感が更に強まる事件が起きた。

分校開設翌年の十月九日西側校舎の階段下から失火し、挙げ句、全焼したのである。階段下は保健室になっていた。当日、煮沸消毒の為の電熱器を使用していた。しかし何かの事情でコンセントを抜くのを忘れ、帰宅してしまつたのである。そのため過熱し、燃え広がってしまったのである。運の悪いことは重なるものである。校舎の中央にあつた防火壁が当夜、十分に閉めてなかつたのである。この結果、全焼に及んだのである。近隣のおとなのほとんどが駆けつけたが、せいぜい児童用の机、椅子ぐらいいしか運びだせなかつた。この時、東彦の父親はロブをナイフで切断中、右の掌を深く傷付けた。また、東彦は自宅の庭で燃える炎に照らされ、がたがたと震えながら真っ赤になって崩れ落ちる校舎を凝視していた。翌朝、聳えるようにあつた校舎はぺしやりとつぶれ落ち、黒く炭化した柱が無残に朽ち落ち、白い湯気を吐い

たり、微かに青い煙を揺らしていたりしていた。東彦は無性に泣きたい気持ちに駆られたのだった。校庭には消防職員、消防団員やPTAの役員、それに警察官など多くの人々が所在なげにたむろしたり、タバコを吸ったりしていた。校舎跡の東端に向かって歩いて行くと消防員が一人腰をかがめ、顔を地面に寄せているのが見えた。何だろうと近寄ると、小さな囲炉裏を作りその上に給食用のアルミの椀を載せている。彼はその下のわずかなおき火を吹いて火をおこしているのだった。椀の中の汁は茶色い色をしていた。彼は味噌汁を作っていたのだ。具は何も入っていないかった。燃え残ったアルミ椀で味噌汁を作り、それをにぎりめしのおかずにしようとしていたのだった。東彦は生々しい人の命の営みを見たように思えた。人はどこでも、どのようにしてでも命を繋ぐようにするものだと、妙に感心したのであった。

学校がなくなつた東彦たちは再び長町小学校に間借りをし、四ヶ月ほど通うことになった。間借り生活の間「本校」の子どもたちから「やーい、焼け学校」とはやし立てられ辛い、悔しい思いをしたのも度々であった。再建された学校のあちこちに消火用水の入ったドラム缶が置かれた。そのドラム缶は何故か赤色に塗られていた。

そしてその中央には縦書きで「こんど焼けたらなにもない」と白いペンキで鮮やかに描かれていた。白が赤を制するという意味もあつたのであろうかと考えられる。

東長町小学校が設立された当時は、二階建ての校舎が校庭の北端に一棟があつただけで体育館はなかつた。何かの行事時には二階西端の二教室の仕切り壁を抜いて使用していた。東彦たちの卒業式もここで行われた。校庭にはいわゆる「朝礼台」がぼつんとあつたきりで遊び用具もできていなかった。また、校庭の東外れには大きな沼があり、フナやナマズがごっそりと泳ぎ、剣のようなガマの葉が沼のあちこちに生えていた。休日となればたくさんの釣り人がこの沼の周りを取り囲んでいた。東彦もその輪の中にいるときもあつた。学校の沼で釣りができたのである。いい時代でもあつた。

分校の開校式は一九五二（昭和二十七年）年四月一日であった。東彦が九歳と四ヶ月、小学校三年生であつた。開校式当時は朝から大風であつた。蔵王連峰から吹き下ろす風は小さな子を吹き飛ばすほどであつた。式は校庭で行われた。実行委員長の長老が詔りの強い仙台弁で祝辞を述べた。しかも、小難しい言葉を交えてマイク無しの肉声であつたから、東彦たちにはほとんど理解できな

かつた。しかし、最後の万歳三唱だけは鮮明に記憶している。羽織袴の長老が両手を挙げた瞬間、裸の手がむき出しになり、黄色い二の腕が妙に生々しく見えたのだった。しかもその時、運悪くその日一番と思われる強風が吹いて来て長老は飛ばされ、朝礼台の端までタ、タ、タ、タと横滑りをして行った。校庭に並んでいる者皆が息を飲み、静まりかえつた。しかし、さすがに長老であつた。どうにか踏みこたえて元の位置に戻り姿勢を整えると、何事もなかつたようにもう一度万歳三唱に取りかかつたのである。子どもたちも先生方もそれにならつて一斉に唱和したのであった。

東彦は入学から二年間、長町小学校で学校生活を送つた訳であるが、その記憶は定かではない。むしろあまりないといった方が正確である。そのおぼろな記憶の中でも鮮明なものがいくつもある。その一つが二部授業である。教室が足りないため、一教室を異学年が午前と午後とで共用したのであつた。多分二回ほどであつたと思うが、午前授業のほうはどうしたことか午後授業と間違つてしまつて登校したことがあつた。おそらく東彦の間違いでなく、母親の勘違いであつたらう。教室に入らうと廊下まで行つた。廊下から教室を覗くとどうも様子が

おかしい。教室の中の子どもたちはとても一年生と見えなかつたのである。廊下をうろろろしていると、教室の先生が東彦達に気付き、廊下に出て来た。その先生は東彦の担任ではなかつた。「あれっ、滝川先生はどうしたのだろう」と、東彦が思う間もなくその先生は、「午後の授業は一年生ではないから帰りなさい。これから気をつけるように」と言つた。その先生は、東彦のような違いをする子たちには慣れていたようであつた。東彦のような子が幾人もいたのであろう。しかし、東彦は小一時間ほど歩いてようやくたどり着いたのに、また同じ時間をかけて戻らねばならないことにひどくがっかりしてしまつた。疲労感がどつと襲つてきたのである。しかし、そこは子どもである。「授業がない。もうかつた」程度に考え、すぐに気分を変えた。同じ敷地内の母屋に住む同年の従兄弟の洋平も一緒である。道草をしながら帰ればいいだけのことであつた。親も先生も子どもものんびりとしていた時代であつた。この程度の間違いなどはたいした問題でなかつたのである。

昭和二十五年といえど敗戦から五年が経過していた。しかし、まだ敗戦の混乱から完全に立ち直つた訳ではなかつた。東彦の通学路である国鉄長町駅前では白衣を着

足をなくした傷痍軍人たちがアコイデオンを弾き、手をなくした元兵士が無心をしている姿があった。また、市電の車中にもその姿が見られた。東彦たちはそんな元軍人たちになんとなく恐れを抱いていた。いつも遠巻にしながら急ぎ足で過ぎたのであった。また、未帰還兵も多数いた。東彦の父親の叔父もその一人であった。叔父とは言っても父とはそれほど年齢が違わない。虎男とあった。「虎は千里行つて千里帰る」にちなんで名付けられたという。父の身内から五人が徴兵され、不運にも虎男のみが行方不明になった。満州でのことである。父とは大の仲良しであったということで、父は必死になつて手がかりを求めた。しかし、杳としてその行方は掴めなかった。結局、行方不明のまま戦死となつたのである。村内にはこのような「名譽の戦死者」があちこちにいた。これらのことは何かの拍子に暗い影を落としていた。

この当時の運送手段として、馬車が大手を振っていた。また、農家では農耕馬として馬を飼育していた。現に母の実家にも馬があり、東彦は馬小屋の前を通る度に馬に「おはよう」とか「今日もがんばれ」とか声を掛けたものであった。馬はそのたびに「ふふうん」とか「ぶるぶ

る」とか鼻を鳴らし、前足で地面を蹴つて返事をしてくれていた。この馬は「風」と呼ばれ、東彦も「風、めんこいぞ(可愛い)」などと呼び、馴染んでいた。そんな訳で牛よりも馬の方がとても身近な存在であった。登下校中に、時折馬車に遭遇することがある。行き先が同じの場合、馬車が行き過ぎるのを見計らつて馬車の後にぶらさがったり、あるいは乗つかったりした。馬方(御者)に見つかれば大声で怒鳴りつけられるのだが、むしろそれも大きな楽しみであった。

小学生と言えばランドセルが定番である。しかし、当時、東彦は、自身がランドセルを使用していたという記憶は一切ない。三歳下の妹が豚革のランドセルだったことははっきりと覚えている。この豚革のランドセルは芯にボール紙を使い表が豚革だったという。妹の入学時前後と思われるが、父が訪れた親戚の者に「豚革のランドセルしか買えなくてねえ」としみじみと話していた情景を鮮明に覚えているからである。赤い色のランドセルであった。東彦と対照的で、物持ちのよい妹はこのランドセルを六年間、傷らしい傷も付けず、汚すことさえなく大切に使った。この当時、牛革のランドセルは高価で庶民にはなかなか手の届かぬ品だったのかもしれない。

ひよっとすると、高価という事はばかりでなく品薄でもあったのかもしれない。戦後すぐの、物資が不足していた時代はサメやアザラシの革がランドセルに使われたという。このことから考えると、牛革のランドセルは贅沢品として生産は少なかったとも推測される。こんな有様であったから、東彦の小学校入学時には豚革のランドセルの購入も難しかったに違いない。昭和二十五年頃と言えばまだまだ物資不足であった。ランドセルでなければ風呂敷かズック(帆布)製の肩かけカバンのどちらかであったのではないかと思われる。

東彦の教室は最南端の校舎から渡り廊下でつながっていた。それもまっすぐではなく内側に折れた形である。上から見るとL字を反転した形である。正門に一番近く、塀と教室の間には植え込みあり、形のよい松の木、そして小さな池があった。教室はなんと本校舎から隔離されているような位置にあった。実際に隔離教室であった。東彦はトラホームの眼疾にかかっていた。しかも重症であった。それで「ジュウトラ」と呼ばれていた。このジュウトラの子どもたちが「収容」された特別な教室であった。

トラホームはトラコーマのドイツ語読みである。クラ

ミジア・トラコマチスやクラジミアが原因とされる。直接接触による感染のほか、手指やタオルなどを介した間接接触による感染も多く(Wikipedia)。不思議なことではあったが、東彦の両親や妹たちにはこの感染症はなかった。とにかく当時の衛生観念は極めて低かった。食前やトイレの後の手洗いなどの習慣もなかった。しかも雨さえ降らなければ朝から夕方までの外遊び、泥だらけになるのは毎度のことであった。汚い手や身体を接触するのは当たり前なこと、誰から誰に感染したなどということは分かりようもなかった。学校に入学して健康診断で初めてみつかつたという塩梅で、みつかつたことはむしろ僥倖であつたとも言える。

今ではとても許されないことであるが、学校で、養護教諭がこのトラコーマの治療をしてくれたのである。子どもたちには幸いなことであつた。いや、こうでもしなければ、私たちは我が子の感染性の強いこの眼疾を治療はしなかつたに違いない。多くの家庭ではこの眼疾ぐらいでは「暇がない」とか「お金がもつたない」などと言つて病院には連れていかなかつたからである。子どもたちは、朝、登校すると保健室に行くのである。長椅子に座り順番を待つ。順番が来ると小さい飯ごうの蓋の

ような銀色メッキの金属の容器を目の下に当てる。すると保健の先生（養護教諭）がまぶたをめくり上げガラス製の水差しで目を洗う。流れ落ちた水の受け皿がこの金属の容器であった。次に、細長いガラス棒の先端に軟膏を付け、目にすり込む。その後、脱脂綿でまぶたの上から軽くマッサージして軟膏を眼中に行き渡らせるようにする。この治療期間がどのくらい続いたか定かではないが恐らく一カ月ほどではなかったろうか。この「治療」に当たってくれたのが保健の阿部先生であった。いつも白衣を着ており、色白で目のぱっちりした先生であった。非常にてきぱきとした物言い、その言動に東彦は爽快感を覚えていた。入学して担任に次いで、の憧れの先生であった。ひよつとして東彦は、阿部先生に会えるのが楽しみで休むことなく保健室に通ったのかもしれない。阿部先生とは中学校で再会する。中学校で剣道に打ち込んでいた東彦は、けがやマメがつぶれる度に阿部先生に世話になった。阿部先生は小学校で会った時のままで少しも年を取っていない。それが東彦にはうれしかった。東彦の世代は小学校の中学年ともなると、ほとんどの男の子は「肥後守」という折り畳み式小刀（ナイフ）を携行していた。「守り刀」のような思いで大事にしてい

たものである。その構造は、金属板をU字に曲げた鞘と、リベット留めの芯金、先のがったブレード（刀身）の三部分である。折り畳み式というのが特長と言える。ところがロック機構がついていないので何かの拍子ですぐに刀身が内側に畳み込まれてしまう。その畳み込まれた刃で、小刀を持っている手の人差し指を傷付けることがしばしばであった。東彦の指には今もって残る傷の痕跡が幾つか確認できる。

「肥後守」の使い道は多種多様であった。遊びで一番多かったのはチャンバラゴッコであったが、そのチャンバラで使う刀は竹である。その竹を藪から切り出し、工作するのは全て「肥後守」であった。小学六年生にでもなれば鳥かごまで作った。そのかこの主な工作道具は「肥後守」であった。竹を裂き、枝を切り落とすのも、鉛筆を削るのも、新聞紙を切るのも、時にはセリなどの野草を摘むのにも用いた。刀身がすぐに出てしまうものであったから、たこ糸で巻いて安全性を高めてポケットにしまい込んでいたものであった。どの子の小刀も同じ形、同じ色をしていたから、それぞれが釘の先で鞘の手許近くに名前か印をつけていた。毎夜、寝る前にこの肥後守をぼろ布で磨くのが多くの少年たちの日課でもあつ

た。あたかも侍の刀のような位置を占めていた。そして、この肥後守の使用は、子どもたちの巧緻性をも大いに高めたのであった。

少年たちにとり刃物は身近な存在であった。多くは小学生にもなると鎌を持たされ草取りや草刈りをさせられた。また鉋や斧、まさかりなども道具として使い慣らされていった。東彦も、五年生の頃から風呂の燃料である亜炭をまさかりで割っていた。この亜炭とは石炭の中でも最も炭化が低いもので、着火しにくく、燃料カロリも低い。東彦の自宅近くの八木山や向山で採掘されていた。同じように斧で薪を割ることも役目になっていたほどである。

このように、刃物を使うのは日常茶飯事であったから生傷も絶えなかった。けがをしたとなると普通は「大変だ」とばかりにすぐ治療をするのが親の対応のほうである。ところが東彦たちの多くの親は違っていたのである。先に叱りつけるのである。親にすれば忙しくてならない日々ののに、余計な心配事や用事を持ち込むことに堪えられず「叱りつける」という行為になったのだと思われる。それで大概の子どもは隠れて自分で治療し、後は口を拭って知らんぷりをしてやり過すことになる。

東彦の右脛の真ん中にちようど半月のような形の傷跡がくつきりと残っている。これは小学校五年生の時に、学校敷地内の池と敷地外の用水路を繋ぐ水路で泳いでいたときに傷付けたものである。誰かが水路に蒸留水の割れたビンを投げ入れていたのである。それを知らずに、ちようど割れた箇所をぶつけてしまったのである。ぱっくりと傷が口を開け、夥しい出血があった。白い骨も見えたほどである。今、その傷を測ると横二・五センチ、縦が一・三センチである。けがを負った瞬間ひどい恐怖に襲われたが、すぐに「母親に叱られる」という思いが頭を占拠した。傷の痛みより母親の怒りの恐怖が勝った。しかし、一緒にいた友人の方がびっくりし「血が止まんなかったら死ぬぞ」と叫び、「とにかく誰かに助けてもらわなくちゃ」と言った。そしてすぐ近くの佐藤さんの家に連れて行ってくれたのである。折よく佐藤さんのじいさんである佐助さんがいた。傷を見た瞬間その出血の多さにびっくりした佐助さんは、すぐにママシ焼酎と赤チンを奥からもってくると治療をしてくれた。

そして、裂いた手ぬぐいを包帯代わりにしてぐるぐる巻いてくれた。「家に帰ったらちゃんと手当てをしてもらうんだぞ」と佐助さんは言った。しかし、そのことで

けがが露見するのを恐れた東彦は、帰宅しても口をつぐんだままだった。また、足を引きずることもけがの発見につながるので痛いのを我慢しながら普通に歩くように努めた。

しかし、こういった類いのものは隠しおさせるものではない。けがをしてから間もなく母親は佐助さんに会ったのである。狭い村落である。むしろ会わないことの方がおかしいのである。その辺のことまで知恵が回らなかったのはやはり十歳の子どもであった。「息子のけがはどうすた。よくなつたが」と、佐助さんは心配顔で母親に聞いたのである。当たり前のことである。ところが事情を知らない母親は「何のごとだべ」と不審な顔をしたのである。そこで佐助さんは事情を話したのである。母親は平身低頭して謝罪と感謝を示したのは言うまでもなかった。そして、帰宅するや息子と呼びつけると「恥をかかせた」「なんで黙っていたんだ」と大声で叱りつけたのはこれまた当然の成り行きであった。その後、母親は東彦の傷を見て驚いてしまった。傷が大きく口を開け化膿しかかっていたからである。母親は東彦の手を引っ張り、急いで近くの町田さん所へ駆け込んだ。町田さんの親父さんは駐留軍に勤めており、その関係で色々

な薬品を軍から持ち出していたのである。そこできれいに消毒し、化膿止めの軟膏を塗ってもらい、清潔なガーゼと包帯で傷を覆ってもらったのである。東彦は三、四日町田さんの所へ通った。お陰で直に傷は治った。しかし、本来なら数針縫うほどの傷であったのである。それでもその傷は、口を開けたような形で歴然として残っているのである。

今の子どもたちはちよつとした打ち身や切り傷などと「バンドエイド」と要求する。幼児ばかりでなく中学生ぐらいでもそれを貼ってもらっただけで安心する。子どもによっては痛みさえも消えてしまう。東彦たちの育ったところは勿論バンドエイドなどはなかった。そのかわり、ほとんどの家庭では「マキキヨ」とか「赤チン」と呼ばれる消毒薬を常備していた。正式名は「マキキヨロクロム液」である。色が赤いため俗に「赤チン」ともいわれていた。細菌発育抑制作用があつて局所刺激性が少ないため重宝がられた。その毒々しいほどの赤色のため塗ると遠くからでも判別できた。また、見る角度によつては金色に光つて見えることもあつた。当時の子どもたちは野外で活発に動き回つて遊んでいたため、切り

傷や擦り傷が絶えなかった。そのたびに赤チンを塗つてもらうか、あるいは自身で塗つていた。それだけで半分治つたような気分になるのだった。実に重宝な傷薬であつた。しかし、一九九〇年頃、アメリカで水銀化合物であるため水銀中毒の危険が指摘され販売中止が呼びかけられた。そのため全世界が使用を控えることとなった。日本では製造工程で水銀が発生するという理由で、一九七三年頃製造が中止された。歴史という壁画があるとすればこの赤チンは昭和の壁にびつたりと貼り付けられているに違いない。

この赤チンほどではないが、消毒薬としてオキシドールも家庭に常備されていた。傷口に液体を垂らすとシユワシユワと細かい泡が湧き上がる。それがいかにも傷の中のばい菌を排除し、殺菌しているようなイメージを抱かしてくれる。特に傷の中に泥などがめり込んでいるときにはこのオキシドールを垂らしながらその泥を掻きだしたものである。大概の擦り傷や切り傷はこのオキシドールで消毒をし、その後赤チンを塗つて放置していた。包帯などという便利な品は常備されていなかった。それが逆に傷の治りを早める結果になつていたと思う。傷口を空気(酸素)に触れさせ、乾燥した状態にしておく方

が傷の治りを早めるという知識を東彦が得たのは、何十年も後のことであつた。

また、富山の薬売りもお馴染みであつた。大概の家庭には「富山の薬」と書かれた袋が居間の柱にぶらさがつていた。その袋はいつの間にか抽出がついた小箱に替わつていた。毎年春秋二回、配置員が各家庭を訪れていた。東彦はこの配置員の訪問を楽しみにしていた。というのは、おみやげ(おまけ)がもらえたからであつた。そのみやげとは今から考えると、紙風船やゴム風船という他愛もないものであつたが、当時の東彦のような田舎に住む子どもたちにはなかなか貴重なものであつた。母の由美は頭痛持ちであつて、この置き薬の「ケロリン」とか「サフラン」を時折服用していた。しかし、この薬箱もいつの間にか姿を消してしまつていた。子ども時代の思い出の一つが消えてしまったようで、東彦は寂しい思いに駆られた。

学校では子どもたちがけがをすることが多かつた。多くは転倒しての擦り傷などの外傷である。時には喧嘩での咬み傷やひっかき傷もある。喧嘩で負つた傷で保健室へいくことはほとんどない。それは子どもながらの一種の矜持であり、また教師から叱られる要因を避けるため

でもあった。それ以外では大手を振って保健室に行ったものである。大概「またけがしたのね、いい加減にしないよ」などと叱られるのが落ちであったが、男の子たちにはそれが一種の快感であった。担任の叱責は成績に関係し、また家庭に通知されるなどの不都合な事態が付随する虞があった。それに引き替え、保健の先生の場合はその場限りで完結する。また、保健の先生の叱責は、その根底には愛情が潜められていた。子どもは愛情には聡い。保健の先生にどんなに大声で叱られようともそれは怒りではないということに十分に承知していた。勿論、保健の先生の方も同じであった。従って、子どもたちは気楽に保健室を訪れた。また、その機を窺って聞いたのである。さらに親にも担任にも話せないことをぼろりぼろりと漏らすことがあった。これで子どもたちが救われることが幾たびもあった。保健室は当時からいわば「心の癒やし」の教室でもあった。しかし、三千人もの児童がいた当時の学校で、養護教諭が一名では大変なことだったに違いない。

また、教師数が六五名だったという。通常の職員室には入りきらない人数である。おそらく第二職員室もあったのではないかと推測される。従って日々の職員打合せも

ままにならない状況であったろう。校長であった高橋先生の苦勞の程が偲ばれるのである。

当時、入学式はあったのだろうか。五百を超える新入学生と保護者を加えると千名を超える。校庭ならば可能であったろうが講堂にはとても収容しきれない数である。我が国日本は、習慣とか格式、伝統を重んじるお国柄である。敗戦から五年経ったとは言え、そう簡単に儀式を廃止するということは考えられない。「雨天中止」を前提に校庭で簡単な入学式を行ったのかもしれない。もし、入学式があったとすれば校長の挨拶があったので東彦は高橋先生の話を聞いていたはずである。しかし、この記憶は全くない。

そればかりでない。高橋先生の記憶そのものがない。当然かもしれない。学校再建、そして学校経営に日夜邁進されていた校長先生であった。しかも、高橋先生はこの秋には公選制の県の教育委員として校長職を退職されたのである。東彦たちと一緒にあったのはわずか半年ほどである。ふれ合うこともなかったから記憶に残るはずはないのである。しかし、人生とは不思議なものである。後年、正確に言うと大学を卒業した後の一年間ほど先生の経営する保険関係の会社に世話になったのである。大

学卒業前の三月頃だったと思うが、高橋先生は県議会議員をしておりその改選があった。東彦はひよんなきっかけてその選挙を手伝った。卒業を控え、就職は地元のあつた小さな出版社に決まっていた。ところがその社長は「総会屋」で「さまざまな悪評がある人物であるから就職はするな」という父方の警察官であった伯父から「だめだし」がきたのである。父親からもきつい言葉があり、東彦も気乗りしなくなり結局入社を断ったのである。土壇場で先がなくなってしまうと東彦に「私の会社でよかつたら手伝ってくれないか」と声を掛けてくれたのが高橋先生であった。東彦はその言葉に甘え、結局一年間その会社で過ごしたのである。仕事は伝票の整理が主なもので比較的時間の余裕があった。中途半端な選択で苦しい思いで日々を過ごしていた東彦は、考えあぐねた末に教員になろうと決心した。そのことを聞いた高橋先生は「暇な時間には受験勉強をしてもいいですよ」と温情をかけてくれたのである。このお陰もあって、翌年には小学校の教員に採用されたのであった。高橋先生は恩人とも言えるのである。しかも、先生の次男であるM氏にも多大な恩恵を受けたのである。氏は大学の一年先輩であった。東彦が大学二年の時、氏が主宰していた「資本

論研究会」に入会したことをきっかけに知り合った。氏は学究肌で大変な読書家であった。東彦も読書好きではあったが文学に偏っていた。しかし、M氏のアドバイスや影響もあってマルクス関係の経済書や思想書、サルトルなどの著書も読むようになった。氏に一步でも近づきたいという思いで一杯であった。氏が勧めてくれた書はほとんど目を通した。しかし、さすがに『資本論』のドイツ語版は「積んで置く」に終わってしまった。これが東彦の限界でもあった。氏からは思想的にも人生観においても大きな影響を受けたのである。氏は東彦にとって友人であり、兄のようであり、師のような存在でもあった。今日、曲がりなりにも小説の執筆が出来ているのは氏のお陰であると言っても過言ではない。

二. パイナップル缶詰

敗戦の年、東彦は二歳であった。この頃の最大の国民的課題は食糧問題であった。敗戦の翌年一九四六年五月十二日には「米よこせデモ」が行われ、同年五月十九日には「飯米獲得人民大会」別名「食糧メーデー」が皇居前で行われた。食糧遅配、遅延に抗議する集会である。デモ隊が皇居に入ったほどである。最大で二十五万人が

集結したという。闇市の闇米を拒否して配給食糧のみで生活を続けたある裁判官が餓死したのもこの頃(一九四七年)のことである。

しかし、東彦の家族はこの食糧不足とは無縁であった。東彦の父の、そして母の実家も農家であったからである。父は勤務の合間を縫って実家の農業を手伝った。この農作業の中で、裸足で田んぼの作業をしている間にワイル病という重篤な感染症にもかかってしまった。高熱のため、頭髮がごっそりと抜け落ちてしまうほどの病であった。これはドブネズミ、クマネズミが媒介する重症性の病気で悪寒・戦慄を感じて高熱を発し、黄疸が現れ、肝臓・腎臓に出血を起こす。幸い、伝手を頼り進駐軍から特效薬を入手し治癒した。そのときの薬代は米二俵であったという。農家であったからこそできたことであつた。

農家といえども足りないものは多々あつた。中でも砂糖は貴重品で減多に口には入らないものであつた。その減多に口に入らない砂糖の懐かしい思い出が東彦にはある。冬であつた。東彦は母屋の祖母の所に行つていた。外は吹雪いていた。隙間から吹き込んだ乾いた粉雪が、板間の居間の片隅にうっすらと積もるほどの寒い夜であつた。

あつた。居間と言つても板張りで優に三十畳はあると思われる部屋である。板間の板は磨き込まれ黒光りしていた。この居間に続いて台所があり、大きなかまどが三つ並んでいた。その先が広い土間であり玄關へと繋がつていた。この広い、広い空間に暖房は囲炉裏一つのみであつた。囲炉裏には赤々と薪が燃えていた。自在鉤に吊されていた大きな鉄瓶の口から湯気が盛んに噴き出していた。囲炉裏に面した身体の表は暖かつた。顔などはむしろ熱いほどあつた。ところが背中はずくつとするほどであつた。一つの身体に熱帯と北極という相反する気候帯が同居するようなあんばいであつた。その上、隙間だらけの家の造りであるために、家の中にもかかわらず風が走ることさえあつた。「むずり」という綿入れはこんな環境が生み出した暖房衣であつた。冬季期間はおとから子どもまでこのむずりは必需品であつた。

こんな寒い夜は、よく祖母が昔話をしてくれた。祖母の話のレパートリーは少ないものであつたから、同じ話が幾度も繰り返された。しかし、東彦たちは飽きもせず、聞く度に聞き入つていたのであつた。また、薪が炎を上げ、鉄瓶が蒸気を吹き上げる囲炉裏は、昔話の舞台としてはこの上ない舞台設定であつた。この夜の祖母の話は、

祖母十八番の「狐のおふるめ」であつた。「おふるめ」とは「振舞・おもてなし」のことである。

「ゴンベさんが、飛び地の耕作の帰途、スキの草原で狐にバカされ馬糞のまんじゅう、馬尿の酒を振る舞われていい気分になつていた。帰つて来ないゴンベさんを探していた村の衆が朝になつてようやく見つけた」というよくある話である。

祖母の昔話が一段落した後であつた。

「今晚はおめいだけ(あなたたち)わらす子にうめいものかしやげ(食べさせる)てやつからな。待つていろよ」

そういうと、居間続きの台所に立ち、孫たち三人分のだんぶり茶碗を持つて来た。その中には葛が入つていた。その葛に白い小さな粒状のものをスプーンで掬つて一杯ずつ入れた。そして鉄瓶からお湯を注いだのである。

それを見ていた子どもたちは「わーっ、葛湯だ」と歓声を上げた。今で言う食後のデザートのようなものである。しかし当時、デザートなどという洒落たものはない。かつたし、言葉すらなかつた。また、お菓子などの類いのおやつなどというものもなかつた。おやつと言えばトウモロコシ、サツマイモやジャガイモなどを茹でたもの

である。全て自前の農作物からの手作りおやつであつた。また、子どもたちが学校から帰宅し玄關に入るか入らないうちに「かあちゃん、腹減つた。何がなえ(何かないですか)」と叫ぶと、「かずのこでも嚙つてろ」などと台所の奥から叫ぶ母親の声は聞き慣れたものであつた。当時数の子を持つニシンは「猫跨ぎ」と呼ばれるほど漁獲が多く、大概の家では箱買いをしていたほどであつた。従つて数の子も貴重品からほど遠いものであつた。

「ばっちゃん、このくず湯甘いね。砂糖が入つてんの」

「うんだ。今夜は凍える寒さだから、身体、暖まるように特別に入れたんだ」

「ばっちゃんありがど。やつぱり砂糖が入つてるとうめえな」

「うんだ、うんだ。あまこいな。やつぱりひと味違うよ、

ばっちゃん。ありがどうね」

「ひと味違う、なんておとなびた言葉をいづ覚えたんだ、東彦」

「いづつて、一人で覚えたんだすべ。もすかすたらラジオかな」

「きょうびのこどもだすはませているな。ばっちゃんは

負けたよ」

子どもたちは「うまいうまい」と言いながら、大事にそうに一口一口とくず湯を啜っていた。その喜びの顔に囲炉裏の赤い炎が照り返っていた。この頃の家庭での夜の楽しみはラジオを聞くことであつた。おとなが聞くラジオの音は自然と、また否応なしに子どもの耳にも入っていたのである。従つて子どもながらに浪曲をうなるなどというのも珍しくはなかつた。洋平の兄が浪曲調に「うめえなああ」と言つて皆を笑わせもした。家族が心の底から睦み会え、ことさらに「絆」など声高に言う必要もなかつた時代であつた。

戦後の物不足の時期、砂糖が客へのおもてなしとしても使われていた。東彦が高校一年生の時のことで、昭和三十四年のことであつた。「もはや戦後ではない」と『経済白書』に記述されたのは三十一年のことである。

東彦は友人であつた級友の自宅に招かれた。仙台駅近くの一軒家であつた。東彦の住む村落とはまるで違つていた。空襲の被害からなんとか逃れたらしくビルの間にかろうじて残された家屋という感じの住宅であつた。古びてはいたが良く手入れされた伝統的な切妻造で瓦葺きの家であつた。十坪あるかないかの庭は石も置かれ、植木

職人の手が入っているのだろうか整然とした枝の木々が巧みに配置されていた。自宅とはあまりの違いに東彦は尻込みすら感じた。その友人の家は、その日、祖母だけが在宅していた。「よぐ（良く）来てくれたごつちや。

ゆつぐりしていつてけさい」と温かな言葉をかけてくれた。そして出してくれたのが小皿にこんもりと盛られた砂糖であつた。さすがに東彦は驚いた。もうこの頃には「生のまま」の砂糖がもてなしとして出されることは、東彦の村落でもなかつたからである。しかし、帰り道々東彦は市電の中で考えた。「きつとあの砂糖は友人の祖母の最大のもてなしだったんだらうな」と。そして、戦後の苦しい食糧事情を生き抜いて来た祖母の歴史が体現されているのだとも思った。それを考えると友人の祖母への感謝の気持ちがふつふつと湧いて来たのだった。

甘味について東彦にはもう一つ強烈な思い出がある。砂糖の直接的な甘みではない。砂糖の甘みは舌の味蕾を刺激し、脳に直接伝わる甘さである。しかし、思い出に残る甘味は湧きいであるような、みずみずしい甘さであり、心を包み込む甘さであつた。

小学校入学の日の教室であつた。背がそれほど大きくなかつた東彦は、教室中央の前から二番目ほどの席だつ

た。六十人近い同級生の集団に入るなどと言うことは初めての経験であつた。町場に生活していた同級生の中には幼稚園に通い、集団生活には慣れていた児童もいたに違いない。しかし、それほど多かつたとは思われない。多くは野放し状態で野山を駆けずり回つて育つていた。それらの児童たちもやはり東彦と同じに、大集団とも言うべきクラスの状態に緊張し、落ち着くことは出来なかつただろう。東彦はしきりに後ろを見た。母親の姿を探したのである。後ろには親たち、ほとんどが母親たちだつたが、密集して子どもたちを注視していた。教室に入り切れない母親たちは、廊下から教室を覗いていた。廊下と教室の壁はガラス戸で仕切られていたので、教室の様子は廊下からも見えたのである。

この日、入学のお祝いの言葉やその他の連絡事項の伝達が終わつた後に、缶詰のパイナップルが配膳されたのである。勿論、東彦が初めて目にし、口にするものであつた。配膳後、この食べ物の説明や食べ方について担任から説明があつた。しかし、東彦にはそんな説明など上の空であつた。初めて見る缶詰のパイナップルに眼を凝らしているばかりであつた。そして、どのように食べたらよいか不安が先立つた。その不安をかき消そうと

周りの級友たちを見た。見た途端、東彦の目はその級友の目と合つた。同じように不安な目をしていた。教室の中の子どもたちの多くは、皆、初めて目にするパイナップルに戸惑つていたので。しかし、日常的に飢餓状態にあつた子どもたちには食べたいという欲求は強かつた。というより、一種の征服欲である。とにかく、どんなものでも食べ物であれば喰らいつこうという精神が旺盛であつたのである。その後遺症であろうか。はたまた磨かれた才能とでも言おうか。二つ並んだラーメンの麺の多寡は一瞬にして判別できるのである。これは食の窮乏時代を過ごして来た東彦たちの同世代の多くが身につけていると思われるのである。誰に教えられたものではない。生活の中で身に着けた生存競争力であろう。誰かが食べ始めた音が聞こえると、それに習おうとする子どもたちが続いた。東彦も釣られるようにそろそろと皿を両手で持ち上げ、口をすばめて皿の縁に近づけた。

この入学式でのパイナップルの配膳について、東彦は高校の同級生五、六人に尋ねたことがある。しかし、そのいずれの同級生もそんな記憶はないというのである。皆異なる小学校であつた。このことを考えると、このパイナップル缶詰の給食は、市内小学校全校で実施された

ものではなかったようだ。この僥倖に出会えたのは限られた小学校であったのかもしれない。

このパイナップルはアメリカ政府が放出したものである。『仙台市史』には「同年（一九四七年・昭和二十二年）、アメリカ政府が放出した輸入缶詰（パイナップル・トマトジュース・乾燥ホウレンソウ・肉類）が配給され缶詰給食が実施された」（P四八三「学校給食」とある。この年から三年後東彦たちは入学する。しかし、東彦たちもこの恩恵に浴したのである。仙台市内小学校において完全給食（二十八校中二十五校）が開始されるのは昭和二十六年のことである。東彦が入学した年の一年後のことである。このパイナップル缶詰は給食の一環として供されたのであろう。長町小学校はこの年に給食が開始されたと思われるが、東彦にはその記憶がない。現在でもそうであるが、新入生の給食開始は五月の連休明けである。それまでは新入生は十二時前に下校している。学校生活に慣れるため午前授業となっているのである。東彦の一年生時にはもう一つの事情があった。児童数が多いため二部授業であったことである。これらの事情で一年生は給食が実施されなかったのかもしれない。

その缶詰パイナップルが瀬戸物かあるいはアルミニウム製

の皿で供されたのかは定かではない。ただ、フォークが備えてあったように記憶している。当時の東彦たちの日常生活の中ではフォークは珍しかった。その使い方に戸惑いを覚えた。だが、スプーンと似たり寄ったりと思えば、その逡巡は一瞬であった。パイナップルを切り、突き刺し、口に運ぶ用具であるとすぐに合点だったのである。

東彦はすばめた口先で、恐る恐る汁を吸った。今まで味わったことのない甘さであった。その汁が口の中に広がると同時に直前であった。その甘味が口中にぱつと広がった。砂糖とは違う爽やかな甘さであった。「世の中にはこんなにうまいものがあった」と驚嘆した。その驚嘆が消えぬうちに更に汁を吸った。ぐくりと汁を飲み込んだ。その汁が喉を通ると時、その喉も甘みを感じたのである。口の中に唾が溢れていた。東彦には初めての体感であった。胸をわくわくさせながらフォークを手にし、果肉を慎重に切り裂き、そのかけらを口に入れた。果肉を噛んだ時の心地よい歯ざわり、そして歯に染み入る甘さに東彦は再び歓喜の声を上げた。「うめえなあ」と。そしてこの時、歯も甘さを感じるということを経験したのであった。パイナップルの最後のひとかけらを大事に口の中で転がし、じっくりとその感触を味わい、最後

に少しずつ嚙り、それを更に丹念に噛み砕き食道へ送り込んだ。砕かれたパイナップルはゆっくりと食道を通り、胃の袋に収まったのである。さらに東彦は、皿に残った汁を舌を出し入れしながら隅々まで舐めた。満ち足りた感動が全身に広がった。全身の血液が胃に集中したのか他の身体部分が弛緩してしまったような気分であった。その時、東彦は、彼の背後立ち並ぶ母親たちの喉がぐくりとなり、唾を飲み込む音を聞いたように思った。勿論それは東彦の幻聴に違いないのであるが、子ども同様母親たちも甘味に飢えていたはずである。母親たちが唾を飲み込んだとしても少しも不思議なことではなかった。

不可能なことではあったが、もし、母親たちにもこのパイナップルが供されたら、この時の教室はどんなにか幸せに満ちていただろうか。

その夜、東彦は、母が「戦争前はバナナが安くて飽きるほど食べたんだよ」と何やら負け惜しみのように語ったのを記憶している。「台湾からどんどん入って来てね、屋台でよくバナナの叩き売りをやっていたよ。今じゃあんなに安かったバナナの叩き売りの字も見えないよ。やっぱり戦争をしちゃいけない」と、バナナの話が続けるばかりであった。東彦は「かあちゃんもパイナップル食いでがった

（食べたかった）」とよほど言いたかったのだが口にはしなかった。

後年、世の中が落ち着き、パイナップルの缶詰も出回るようになる、母は缶詰のパイナップルを購入して来るようになった。特に、風邪などで子どもたちが伏せると、決まって必ずパイナップルの缶詰が器に盛られて枕元に置かれた。東彦はそのたびに全身が喜びで一杯になり、病の苦しさは一時的に忘れることさえできた。

トラウマということがよく言われる。精神的な傷手のことであり、負の遺産とも言える。しかし、このパイナップルの甘味は、東彦にトラウマとは正反対の、そして思わぬ喜びをもたらした。時に夢の中、時に白昼夢としてこの甘味が突然蘇ってくるのであった。そのたびに東彦は喜びに浸り、幸せに包まれた。さらに、時が経つに連れそのパイナップルの大きさが拡大し、ついにはお盆のような大きさにまで膨れあがった。至福という言葉があるが、東彦のこの時の幸せ感はこの至福という言葉がぴたりであった。その後、このパイナップルの思い出の味は、東彦が苦境にあった時に救ってくれた。「生きていけば必ずまた、パイナップルのような味に出会えるはずだ」と、支えになったのである。そして、「人生は食にあり」という言

葉をぼんやりと認識もしたのであった。それは見事に的を射っていたのである。その後の人生の節目には必ずと言ってよいほどに食の思い出が付随していたからである。全くと言ってよいほどのいやしい根性と言えよう。しかし、東彦は座右の銘などと言うものは哲人のような高邁な言葉でなくてよいと思っている。むしろ、より具体的に、生き死に関わるむき出しの言葉のほうが効果的であると考えているのである。このパインの味は良い意味でのトラウマである。しかし、視点を変えるとこのような東彦の思い、感慨というものは誇大妄想的に見えるかも知れない。だが逆に、この時代の飢え、特に甘味さに対する欠乏感を言い表しているとも考えられるのである。

このあと十数年間も、たびたび夢に現れるこの感動のパインの味は、実はアメリカによってもたされたということを知らずにいた。敗戦は思いがけなくも東彦の舌にパインの味と、さらに後年経験するいくつかの味をもたらしただけである。それはチョコレートであり、脱脂粉乳であり、コココーラであった。これらのアメリカ味の体験は全てに先んじての西洋体験であったと言えよう。もっと大げさに言うなら、このパインはこの後に押し寄せるアメリカンフードの先駆けであったとも言えよう。

連合軍の占領は何も土地や権力だけではなく、日本人の味覚をも征服してしまったとも言えるのである。もし、当時、アメリカがミルクの代わりに味噌汁、パンの代わりに米を配給していたならば、現在の日本の食風景はかなり違っていた思うのである。

(続く)